

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2007～2008

課題番号：19320019

研究課題名(和文) 作ることの視点における1910-40年代日本近代化過程の思想史的研究

研究課題名(英文) The modernization of Japan between 1910's and 1940's: A study in the history of thought from the viewpoint of poiesis

研究代表者

伊藤 徹 (ITO TORU)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授

研究者番号：20193500

研究成果の概要：科学技術として先鋭化している《作ること》が、日本において近代化の進行した明治末期から太平洋戦争開戦までの間に、知識人や芸術家に残した精神的刻印を具体的に取り上げ、哲学、教育学、社会学、政治学、建築史学、美術史学、文学の参加研究者によって、学際的に考察し、著書・雑誌論文・講演のかたちで、これを公表した。

交付額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費      | 合計        |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 2007年度 | 4,100,000 | 1,230,000 | 5,330,000 |
| 2008年度 | 3,500,000 | 1,050,000 | 4,550,000 |
| 年度     |           |           |           |
| 年度     |           |           |           |
| 年度     |           |           |           |
| 総計     | 7,600,000 | 2,280,000 | 9,880,000 |

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：(1) 思想史 (2) 美術史 (3) 政治学 (4) 国文学 (5) 建築史・意匠

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、2006年度から2年間継続したサントリー文化財団による助成に基づく共同研究「1910-30年代日本における《作ること》の諸相とその精神的意味」(研究代表者:伊藤徹)から出発したが、同研究において、2006年度内に実施した5回の研究会合、計8件の研究報告を行なったことが、研究の基盤となり、さらに研究分担者および研究協力者としての関連研究者複数の参加を得て、研究開始に臨んだ。

## 2. 研究の目的

本研究は、科学技術を「作る(ポイエーシス)」という人間存在の根本可能性の先鋭化さ

れた形態と捉え、そこから日本近代の生成過程を読解し、科学技術化が引き起こしている諸問題を思想史的に位置づけることに目的を定めたものであるが、美術・工芸、建築、政治、教育、文学、哲学思想といった諸局面において《作ること》の具体的なあり方を析出することは、既存の専門分野によって分断されがちな精神史研究を今一度統一的な像の獲得へと促すとともに、諸分野の従来の枠組みを再考に導くはずのものであった。

## 3. 研究の方法

(1)京都工芸繊維大学造形工学部門・伊藤研究室内に研究運営センターを設置し、参加者全体に対して、情報の集積・交換、その他事務

手続きなどのサポートを行なった。

(2)研究単位を6 (①技術と哲学・思想、②技術社会における美術工芸の変貌、③建築の近代化のなかの空間と人間、④技術と社会のかたち、⑤技術化される教育、⑥技術化のなかの文学) 設定し、それぞれに研究分担者・協力者を配置して、情報収集と分析を行なった。

(3)予備会合も含め総計 11 回の会合をもち、情報の共有化ならびに全体での検討を行なった。

#### 4. 研究成果

本研究の最大の成果は、日本近代という時代の思想史を従来の専門分野を超えて学際的に考察し、美術・工芸、建築、政治、教育、文学、哲学・思想の諸局面に残された〈作ること〉の痕跡を、具体的なあり方において取り出すことによって、近代化を支えた精神史的根本動向を明らかにしたことである。研究対象となった知識人・芸術家を一応既存のジャンルに分けて挙げるならば、以下のように多数に及ぶ。美術・工芸；富本憲吉、シャルロット・ペリアン、村山知義、柳宗悦、萬鉄五郎、建築；井上充夫、岸田日出刀、ブルーノ・タウト、浜口隆一、堀口捨己、前川國男、村野藤吾、政治；大熊信行、高田保馬、戸坂潤、福本和夫、三宅雪嶺、教育；小野島右左雄、小原國芳、木村素衛、文学；稲垣足穂、折口信夫、木下杢太郎、幸田露伴、佐藤春夫、夏目漱石、萩原朔太郎、長谷川天溪、樋口一葉、保田與重郎、山村墓鳥、哲学；九鬼周造、下村寅太郎、土田杏村、中井正一、西田幾多郎、三木清など。

近代化は、〈作ること〉の先鋭化たる科学技術として、一切を有用化・手段化するものであるが、そのことは生の諸活動を束ねるはずの目的の不在を惹起し、明治維新以来のその動向が当座ベースとしていた旧来の家共同体という生の地盤を空洞化させていく。したがって近代化は、そこに発生する空虚さの補填を余儀なくされるのであり、補填のための装置を作り出さねばならない。本研究は、そうした装置が、あたかも「作られざる自然」として、虚構でありながら生に意味を与えるもの、すなわち「神話」として、産出され、機能しているさまを、それぞれの局面において浮かび上がらせたのである。その具体相は、下記論文等が詳細に明らかにしたところに譲るほかないが、概略を述べれば、明治の近代化を支えた「国家」神話は、明治の末から大正にかけて「個人」へと移り変わって行き、さらにその脆弱さの露呈のゆえに、人々は、再生産された、だが明治のそれとは根本的に異質な昭和の「国家」に、己れの存在の意味

を託すようになった。

このように見たとき、「作ること」は、建築作品や社会制度のように、ものや人を形体化する具体的な造形とともに、そうした造形行為もそこに基づく地盤をも作り出す、いわばメタ的な次元での作用としても、考えられねばならないことが明らかになる。もちろん神話の語りとしてのそうした「作ること」は、それだけを切り離して考察することによって、一種の形而上学的な原理へと変質してしまいかねないのであって、虚構を産出するこの力は、常に歴史の具体相とともに、考察されねばならない。このことは、本研究が当初から念頭に置いていたことではあるが、実際の研究の過程でさらに強く意識されるものとなったのである。

こうして生の地盤としての「神話」の形成と語りを、そのメタ的な能作を意識しつつ同時に具体的な事実に基づいて考察するという課題は、本研究の延長線上において、新しいプロジェクト「1890 - 1950年代日本における《語り》についての学際的研究」という企画として結実し三年に亘る基盤研究(B) (21320021)としての採択を見た。またそれぞれの分野の雑誌などを通して公開された論文は、関係研究者の注目を浴びるところとなり、新共同研究企画への参加の希望が多数寄せられている。

また研究内容の一部は、中華民国 4 大学、ドイツ連邦共和国 1 大学において学術講演のかたちで公表され、当地の研究者たちの関心を惹くとともに、とくに同じく東アジアの一角にあつて近代化の運命を経験し、しかも日本帝国主義による植民地支配の記憶を残す中華民国の若手研究者との共同研究へと結びつき、新企画の一部を成すに到っている。さらに代表者がロンドンにおける夏目漱石関係の調査の折に行なった研究交流が機縁となって、ロンドン大学アジア・アフリカ研究院での学術講演の可能性が生じ、その後の交渉を通じて現在、具体的な企画の段階に入ってきており、次期基盤研究の範囲において、実施される予定である。それによって、本研究の成果がより広いかたちで公開され、さらに新たな研究交流を生み出すことは、十分期待できるといえよう。

研究成果の公表は、基本的に論文および学会発表・報告、図書、学術講演のかたちで行なったが、論文の題目などは、5. に挙げた。なお同〔その他〕〈報告冊子〉に記載したとおり、従来の報告書のかたちに準じて成果論集を作成し、論文と研究会合の記録を残した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 15 件)

1長妻三佐雄、「共同性の再生に関する一考察」、『大阪商業大学論集 谷岡学園創立80周年・大阪商業大学開学60周年記念号』、大阪商業大学商経学会、査読有、2009年5月(予定)

2伊藤 徹、「砂の中で狂う泥鰌——夏目漱石『行人』の語り」、『東西学術研究所紀要』、第42輯、関西大学東西学術研究所、19-46頁、査読無、2009年4月

3 昆野伸幸、「戦時期文部省の教化政策——『国体の本義』を中心に」、『文芸研究』、第167集、日本文芸研究会、64-75頁、査読有、2009年3月

4笠原一人、「白路社建築創作所および鉄扉社建築会の活動の概要とその特徴について」、『日本建築学会計画系論文集』、第633号、日本建築学会、2513-2518頁、査読有、2008年11月

5秋富克哉、「作るということ——『創造的』純粋経験からの展開」、『理想』No.681、理想社、17-28頁、査読無、2008年9月

6岡部美香ほか、「何が教育を可能にできたか」、『近代教育フォーラム』第17号、教育思想史学会、179-190頁、査読無、2008年9月

7伊藤 徹、「二〇世紀初頭の精神的断層」、『京都工芸繊維大学 学術報告書』、2008 Vol.2 (No.1)

<http://repository.lib.kit.ac.jp/dspace/bitstream/10212/1817/1/ito.pdf>、査読無、2008年6月

8長妻三佐雄、「多様性がつむぎだす個性——三宅雪嶺の思想」、『子規博だより』第27巻1号、松山市立子規博物館、4-7頁、査読無、2008年6月

9 宮野真生子、「自己の「形」への欲望——九鬼周造の個体論をめぐって」、『実存思想論集』、XXIII、実存思想協会、122-138頁、査読有、2008年6月

10伊藤 徹、「世紀転換期のヨーロッパ滞在——浅井忠と夏目金之助」、『東西学術研究所紀要』、第41輯、関西大学東西学術研究所、19-46頁、査読無、2008年4月

11 竹花洋佑「個性性と媒介——ヘーゲル概念論と“コプラの論理”としての西田・田辺哲学」、『立命館哲学』、第19集、立命館大学哲学学会、39-57頁、査読有、2008年3月

12 西川貴子、「『美術』をめぐる〈物語〉——幸田露伴「帳中書」を軸として——」、『同志社国文学』、第68号、同志社国文学会、36-48頁、査読有、2008年3月

13秋富克哉、「ニーチェにおける「神の死」の解釈をめぐって」、『理想』No.680、理想社、85-97頁、査読無、2008年2月

14秋富克哉、「技術のこころ、こころの技術」、『こころのチカラ』、(財)大学コンソーシアム京都、139-160頁、査読無、2007年12月

15長妻三佐雄、「『公益』と『私益』をめぐる覚書」、『大阪商業大学商業史博物館紀要』第8号、大阪商業大学商業史博物館、111-124頁、査読無、2007年10月

[学会発表] (計 4件)

1松隈 洋「前川國男と日本一太平洋戦争下の思考」、日本建築学会近代建築小委員会研究発表会、2009年3月13日、東京・日本建築学会ビル

2秋富克哉、「ハイデガーと西谷啓治——ニーチェ解釈をめぐって」、ハイデガー・フォーラム、2008年9月21日、東京・学習院大学

3長妻三佐雄「戦後日本のナショナリズム——政治と文化の間」、日本比較文化学会、2008年6月14日、京都大学

4長妻三佐雄「近代日本における『職業倫理』の問題」、韓日関係史学会月例会、2008年3月8日、ソウル・送波文化院

[図書] (計 10件)

1岡部美香「〈人間〉と〈教育〉を問うスタイル——教育人間学の一つの展開——」、平野正久編著『教育人間学の展開』、北樹出版、349-370頁、2009年1月

2笠原一人ほか、『村野藤吾——建築とインテリア——』、アーキメディア、pp.26-27、2008年8月

3笠原一人・松隈洋ほか、『村野藤吾建築設計図展カタログ10』、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、37-44、97-100、101-108、138-141、142-145頁、2008年11月

4松隈 洋「前川國男と日本近代建築」、『関西モダニズム再考』、竹村民郎ほか編、詩文閣出版、128-153頁、2008年1月

5松隈 洋「鬼頭梓の育んだ風景——「生活の根拠」を図書館に求めて」、『建築家の自由 鬼頭 梓と図書館建築』、建築ジャーナル、2008年6月

6竹中 均、「「韓国」陶磁の二十世紀と柳宗悦——植民地期から解放後へ」、デザイン史フォーラム編(藤田治彦責任編集)『近代工芸運動とデザイン史』、265-276頁、思文閣出版所収、2008年9月

7 土田真紀『さまよえる工藝——柳宗悦と近代』、草風館、全337頁、2007年9月

8長妻三佐雄「連続と断絶の相克——戦後日本のナショナリズム」、『近代日本ナショナリズムの軌跡』、米原謙・長妻三佐雄編、萌書房、2009年8月(予定)

9 西村将洋、「長谷川天溪1910-1912——自然主義からフロイトへ」、『言語都市・ロンドン』、藤原書店、和田博文ほか編、2009年5月(予定)

10伊藤 徹編『作ることの日本近代——一九一〇-四〇年代精神史への眼差し』(執筆者:竹中 均、伊藤 徹、荻野 雄、岡部美香、

秋富克哉、長妻三佐雄、西村将洋、土田真紀、笠原一人)、世界思想社、2009年10月(予定)

〔その他〕

〈海外学術講演〉

1伊藤 徹「柳宗悦とモダニズム建築」、国立台湾師範大学、2009年3月2日

2荻野 雄「近代日本における文化とナショナリズム—柳宗悦と沖縄および台湾」、国立台湾師範大学、2009年3月2日

3伊藤 徹「日本近代の美術と三つの神話」、台北市立教育大学、2009年3月1日

4 西川貴子「日本近代文学における〈支那〉及び〈台湾〉表象」、台北市立教育大学、2009年3月1日

5伊藤 徹Die Industrialisierung und die Kunst in der japanischen Moderne、シュトゥットガルト技術大学、2008年10月29日

6伊藤 徹「1912年日本の芸術状況とその精神的意味」、国立台中教育大学、2008年3月5日

7伊藤 徹「二〇世紀初頭の精神的断層」、2008年3月6日、台湾静宜大学

〈報告冊子〉

『「作ることの視点における1910-40年代日本近代化過程の思想史的研究」成果論集』、論文など：

竹田純郎「杏村の象徴主義—近代における〈制作〉の技法」

秋富克哉「経験から自覚へ—前期西田哲学における意志の創造性」、

伊藤 徹「ロンドン—漱石旧居のことなど」

江口 潔「児童の記録を「作ること」について—児童の個性と観察の技術」

岡部美香「美学と教育学の界面—木村素衛における2つの〈作ること〉」

笠原一人「問題群としての村野藤吾」

笹尾佳代「変奏するまなざし—木村荘八『たけくらべ画卷』の位相」

城坂真治「下村寅太郎の科学理解—「世界の形成に参与すること」としての見ること」

高木 彬「ライトする都市—稲垣足穂『薄い街』」

土田真紀「富本憲吉の「アマチュアリズム」再考」

竹中 均「「作ること」「使うこと」からその先へ—〈もの〉をめぐる柳宗悦思想の可能性」

長妻三佐雄「秩序への憧憬—中井正一に関する覚書」

宮野真生子「押韻という夢—ロゴスからメロスへ」

松隈 洋「前川國男と日本—太平洋戦争下の思考」

望月俊孝「漱石文芸の根本視座—『三四郎』、

諸視点の磁場」

講演録

伊藤 徹「1912年日本の芸術状況とその精神的意味」

荻野 雄「近代日本の文化とナショナリズム—築場宗悦と沖縄・台湾」

西川貴子「日本近代文学における〈支那〉及び〈台湾〉表象—佐藤春夫の作品を中心に」

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

伊藤 徹 (ITO TORU)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授  
研究者番号：20193500

### (2) 研究分担者

秋富 克哉 (AKITOMI KATSUYA)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・  
准教授

研究者番号：80263169

岡部 美香 (OKABE MIKA)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80294776

荻野 雄 (OGINO TAKESHI)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：50293981

笠原 一人 (KASAHARA KAZUTO)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・助教  
研究者番号：80303931

竹中 均 (TAKENAKA HITOSHI)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90273565

長妻 三佐雄 (NAGATSUMA MISAO)

大阪商業大学・総合経営学部・准教授

研究者番号：80399047

松隈 洋 (MATSUKUMA HIROSHI)

京都工芸繊維大学・美術工芸資料館・教授

研究者番号：80324721

### (3) 連携研究者